423-805

亞細亞寫眞大觀

大和尙山

（關東州）百三十三回
十二輯ノ三

大和尙山の山城……一
大和尙山の深谿と古城門址……二
唐王殿石彭寺……三
傳說唐太宗の養病床……四
觀音閣勝水寺……五
觀音閣勝水寺の洞窟……六
弘治三年重修勝水寺碑……七
朝陽寺……八
響水觀……九
瑤琴洞と遊僊床……十

大和尙山小史觀　三宅俊成

大連市山縣通一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話(2)六二三五番
振替口座大連七一八番

（毎月一回發行）

版權所有　不許複製

編輯人　大連市山縣通一九三　青山春路
發行人　同　島崎役治
發行所　同　亞細亞寫眞大觀社

大和尙山小史觀

三宅俊成

大和尙山は金州城東二里餘の處に聳え、海拔約六六四米あり。其の形狀雄大、而も風光明美にして山中名所舊蹟多く、名實共に關東州內第一の名山といふべし。

大和尙山は地質學上より見れば、山體の大部分を構成するものは硬質なる硅岩にして、海面より出現し、漸次高さを加へ土地の上昇運動と海の退却と、共れに風雨氷雪の凄じき浸蝕に會ひ、硅岩上に被はれたる厚い石灰岩等の岩層が漸次削剝され、比較的最も風化作用に堪へる硅岩等の岩層が取り殘されて出來たるものといふ。

大和尙山の山名は又大黑山、大赫山老虎山東山マウントサンプソン mount Sonl'Son 等と呼ばる。これ等の名稱中大黑山なる名は最も古く、弘治三年(西紀一四九一)重修勝水寺碑や遼東志全遼志等に見ゆ。又大赫山の名稱は嘉靖六年(西紀一五二七)觀音閣重修碑記にあり。現今日本人のよく用ひる大和尙山の名は既に淸初の顧祖禹の方輿全圖總說成景全圖中に見え、柳樹屯の和尙島に對して呼ばれたるものならんといふ。老虎山と呼ぶ起原は不明なれども土人は昔老虎が居たる故に云ふと、果して然るや。東山と云ふは金州城東にあればなり。マウントサンプソンなる名稱は咸豐年間香港に在りし英國の提督ホープ(Hope)はサンプソン(SamPson)號船長ハンドHand に命じて、遼東艦隊の泊地と陸軍の屯所を索めしめ、ハント船長は大連灣を測量して是を推せしが、これより英人大和尙山此の船に因みサンプソン峰(山)と稱すと。

先史時代の大和尙山は明かならされどもではないが、余は先年大和尙山もの西南に接する鳳凰山の西腹より、石器時代の遺蹟を發見し、遺物包含層を發掘して石斧石劍石庖丁等の得たることより考察して、既に先史時代に於ても、鳳凰山を中心として大和尙山にかけ相當に發展せしことゝ思はる。

有史時代に於ける大和尙山の遺蹟は其の山峰にある城址を第一に推さねばならぬ。此の城址は高句麗の築造せしものと傳ふ

高句麗の風として平地に城を築くと共に、附近の山にも亦城を築き、一朝事變勃發せる際山城に居民を收容して防禦する風あり、姜沆の看羊錄に「諸處山城。頗與邑居懸遠。臨急始收邑居之民。使入山城。」と

此の山城に對して高句麗の卑沙城說が有力なり。即ち隋書に云ふ卑奢城、唐書遼東志等の沙卑城、資治通鑑並に弘治三年重修勝水寺碑記の卑沙城の稱も、皆略名なれども同地であり、大和尙山の古城址を云ふのものなりとせらる。未だ此の城址に對しては考古學的調査はされざれども、築造の形式等より考察して高句麗時代になるものとすることを得べし。

今本城址を卑沙城として主なる隋唐との關係文獻を摘載すれば次の如し。

隋書卷六十四列傳第二十九、來護兒の條「(大業)十年(西紀六一四)又帥師度海。至卑奢城。高麗擧國來戰。護兒大破之。斬首千餘級。將趣平壤。高元震懼。遣使執叛臣斛斯政。詣遼東城下。上表請降。帝許之。遣人持節。詔護兒旋師。」

舊唐書卷六十九列傳第十九張亮の條に「(貞觀十八年(西紀六四四)太宗將伐高麗。亮頻諫不納。因自請行以亮滄海道行大總管。管率舟師。自東萊渡海。襲沙卑城破之。俘男女數千口。」

新唐書卷九十四列傳九張亮の條に「帝將伐高麗。亮頻諫不納。因自請行詔爲平壤道行軍大總管。引兵自東萊浮海。襲破沙卑城。」

資治通鑑卷第一百九十七唐紀十三「貞觀十八年……張亮爲平壤道行軍大總管。帥江淮嶺硤兵四萬。長安洛陽募士三千。戰艦五百艘。自萊州泛海趨平壤。……十九年(西紀六四五)……張亮帥舟師。自東萊渡海。襲卑沙城。其城四面懸絕。惟西門可上。程名振引兵夜至。副總管王大度先登。五月己巳拔之。獲男女八千口。」

全遼志卷之四故蹟志の條に「金州城東十五里。山頂有古城。在鳳凰山之左方約二里。內有二井。四面懸絕。惟南一門可上不知何代築砌。唐張亮帥舟師渡海。攻沙卑城。獲男婦人千口意卽此」

明一統志第二十五卷大黑山の條に「在金州衞東一十五里。絕頂城四面懸絕。惟西向一路可通。其中有井。昔人多避兵于此」

倘本城の卑沙城說に對して海城卑沙城說旅順線の長嶺子驛西北の城山卑沙城說等があれども、前者は資治通鑑等にある卑沙城の地形が四面懸絕只西門上るべしといを記事に該當せぬ點及朝鮮への海上交通路より頗る隔る事等の點に於て、後者は城の甚だ狹隘なる點等に於て卑沙城說が否定される。之に反して本城は遼東半島の南部に在り朝鮮航路の重要地點に近く、資治通鑑等の文獻の地形と全く符節を合し、本城址の卑沙城說に有力なる根據を與ふものなり。

以上の如く大和尙山上の城址は卑沙城とすれは前揭の諸書より考ふるも本城には尠くとも數千の人を收容し得たる事と思はる。若し數千人を收容し得ば城內には何等かの遺物を存すべきならん。併し未だ高句麗時代の遺物として確證し得るものを發見せず。故に本城は外敵に對して一時の避難所に過ぎざるべし。

然らば本山城に對して他に邑城なかるべからず。本山城の近くにある平地の城としては金州城及び董家溝會城子屯の西城子の城址あるのみ。併し何れを取るべきかは今後の研究に待たざるを得ざるべし。

本山城は隋唐との關係頗る深きものありしが、降つて明代に至り倭寇の遼東を侵すに至り、大和尙山にも烽火臺が設けられたり。遼東志に云ふ大黑山臺是れなり。其の遺址は唐王殿の西南斷崖の處にある今點將臺と呼ぶものならん。點將臺は傳說によるに唐の太宗この臺上にて閱兵せし故に云ふとあるも然らず。又明代には勝水寺、朝陽寺等が重修されたり。

降つて淸末日淸日露の兩戰役に於て幾分大和尙山は關係なきはあらざれども省略し、大和尙山の小史の筆の擱き、遙か和尙の峰を仰げば、其の悠久なる姿は禿筆を笑ふが如く見ゆ。

大和尙山の山城

大和尙山の南半の峰より峰へと續く蜒々なる數千米の石壘は高さ約三米幅約二米餘りあり。大和尙山の一偉觀なり。

これは隋書の卑奢城、唐書及び遼東志、全遼志、の沙卑城、資治通鑑並に弘治三年重修勝水寺碑記の卑沙城の舊址に批定せらるゝものなり。

今これを旨定して述べれば、卑沙城は當時遼東半島の咽喉を扼すると共に海上交通の重要なる地點に在りし爲め、隋の煬帝の大業十年(西紀六一四)には隋の高句麗遠征の水軍の將來護兒、本城を攻略し斬首千餘級を得、又唐の貞觀十九年(西紀六四五)には唐の水軍の將張亮戰艦五百艘を率ゐ平壤を衝かんとする途、程名振をして攻略せしめ男女九千口を得たること史書に見ゆ。

倘左に取るに足らざる荒唐無稽の口碑に過ぎざれとも、土人の信ずる本城の築造城の由來に就いて述べん。唐の太宗此の山に來りて病に臥せし時過々山中に鰌魚(泥鰌)あり。來りて封册を得て龍とならんことを請ひしが、太宗其の煩を厭ひ難題を課して曰く。翌日鷄鳴の時を限り一城を山上に築き竣らば汝を封ぜんと。然るに此夜雷雨起り城半ば成らんとせしかば、太宗計を案じ工成らざるに先立ち故に群鷄をして曉を告げ

大和尙山の山城

大和尙山の南半の峰より峰へと續く蜒々なる數千米の石壘は高さ約三米幅約二米餘りあり。大和尙山の一偉觀なり。

これは隋書の卑奢城、唐書及び遼東志、全遼志、の沙卑城、資治通鑑並に弘治三年重修勝水寺碑記の卑沙城の舊址に批定せらるゝものなり。

今これを肯定して述べれば、卑沙城は當時遼東半島の咽喉を扼すると共に海上交通の重要なる地點に在りし爲め、隋の煬帝の大業十年（西紀六一四）には隋の高句麗遠征の水軍の將來護兒、本城を攻略し斬首千餘級を得、又唐の貞觀十九年（西紀六四五）には唐の水軍の將張亮戰艦五百艘を率ゐ平壤を衝かんとする途、程名振をして攻略せしめ男女九千口を得たること史書に見ゆ。

尙左に取るに足らざる荒唐無稽の口碑に過ぎざれとも、土人の信ずる本城の築造城の由來に就いて述べん。唐の太宗此の山に來りて病に臥せし時過々山中に鰌魚（泥鰌）あり。來りて封册を得て龍とならんことを請ひしが、太宗其の願を厭ひ難題を課して曰く。翌日鷄鳴の時を限り一城を山上に築き竣らば汝を封ぜんと。然るに此夜雷雨起り城半ば成らんとせしかば、太宗計を案じ工成らざるに先立ち故に群鷄をして曉を告げしむ。鰌魚終に封を得ずして柳河鎭に歸り潛伏すといふ。

（印畫の復製を禁ず）

（回三輯二十閣大歪細亞）

沙城の地形が四面懸絶只西門上るべしといを記事に該當せぬ點及朝鮮への海上交通路より頗る隔る事等の點に於て、後者は城の甚だ狹隘なる點等に於て卑沙城說が否定される。之に反して本城は遼東半島の南部に在り朝鮮航路の重要地點に近く、資治通鑑等の文獻の地形と全く符節を合し、本城址の卑沙城說に有力なる根據を與ふものなり。

以上の如く大和尙山上の城址は卑沙城とすれは前揭の諸書より考ふるも本城には遙くとも數千の人を收容し得たる事と思はる。若し數千人を收容し得ば城內には何等かの遺物を存すべきならん。併し未だ高句麗時代の遺物として確證し得るものを發見せず。故に本城は外敵に對して一時の避難所に過ぎざるべし。

然らば本山城に對して他に邑城なかるべからず。本山城の近くにある平地の城としては金州城及び董家溝會城子屯の西城子の城址あるのみ。併し何れを取るべきかは今後の研究に待たざるを得ざるべし。

本山城は隋唐との關係頗る深きものありしが、降つて明代に至り倭寇の遼東を侵すに至り、大和尙山にも烽火臺が設けられたり。遼東志に云ふ大黑山臺是れなり。其の遺址は唐王殿の西南斷崖の處にある今點將臺と呼ぶものならん。點將臺は傳說によるに唐の太宗この臺上にて閱兵せし故に云ふとあるも然らず。又明代には勝水寺、朝陽寺等が重修されたり。

降つて淸末日淸日露の兩戰役に於て幾分大和尙山は關係なきはあらざれども省略し、大和尙山の小史の筆の擱き、遙か和尙の峰を仰げば、其の悠久なる姿は希筆を笑ふが如く見ゆ。

唐王殿石彭寺

（寫眞は山門）

唐王殿石彭寺は大和尚山の西南にあり。其の創建の年代は不明なれど、山門の傍にある道光十年（西紀一八三一）建立の唐王殿碑記及び佛殿内の磬の銘に乾隆四十六年（西紀一七八一）とあるより推せば相當古きものならん。併し唐王殿碑記中にある如き唐の太宗高句麗征伐の際此處に　を駐めし故に唐王殿と云ふとは事實にあらざる傳説のみ。佛殿には釋迦牟尼佛の像を安置し、其の前に唐太宗眞觀皇帝之位と書せる牌位あり、これは蓋し唐が此の地の高句麗を征せしことに因み、數奇の土民が唐の太宗の牌位を祀り唐王殿と稱せしなるべし。

大和尚山の深谿と古城門址

大和尚山の西南部は、千仞の深谿をなし、奇岩幽谷にそゝり立ち、關東州隨一の奇勝をなす、深溪に入ること久しからずして、石壘の崩壞せるものを見るべし。これは山上の城塞と共に高句麗時代に造りたるものにして、城門の址ならん、此處は谷の最も狹き處にして約二十三米に過ぎぬ、これより尚進むこと約數百米滴水罅といふ泉の湧く附近に石壘の崩れたるものあり。これは第二の防禦線なるべし。

（印畫の復製を禁ず）

唐王殿石彭寺

（寫眞は山門）

唐王殿石彭寺は大和尙山の西南にあり。其の創建の年代は不明なれど、山門の傍にある道光十年（西紀一八三一）建立の唐王殿碑記及び佛殿內の磬の銘に乾隆四十六年（西紀一七八一）とあるより推せば相當古きものならん。併し唐王殿碑記中にある如き唐の太宗高句麗征伐の際此處に　を駐めし故に唐王殿と云ふとは事實にあらざる傳說のみ。佛殿には釋迦牟尼佛の像を安置し、其の前に唐太宗眞觀皇帝之位と書せる牌位あり、これは蓋し唐が此の地の高句麗を征せしことに因み、數奇の土民が唐の太宗の牌位を祀り唐王殿と稱せしなるべし。

（印畫の復製を禁ず）

（回三轉二十觀大亞細亞）

大和尙山の深谿と古城門址

大和尙山の西南部は、千仞の深谿をなし、奇岩幽谷にそゝり立ち、關東州隨一の奇勝をなす。

深溪に入ること久しからずして、石壘の崩壞せるものを見るべし。これは山上の城塞と共に高句麗時代に造りたるものにして、城門の址ならん。此處は谷の最も狹き處にして約二十三米に過ぎぬ。これより尙進むこと約數百米滴水罅といふ泉の湧く附近に石壘の崩れたるものあり。これは第二の防禦線なるべし。

（印畫の復製を禁ず）

（回三轉二十觀大亞細亞）

觀音閣

（寫眞は　）

觀音閣勝水寺は大和尙山の東腹、一大巨洞の迫る懸崖の處に建立せらる。

本寺も亦唐建說あれど何等確證なく、弘治三年の重修勝水寺碑によれば明の洪武の初め陳德新方影山なる二僧此の地に遊び、寺院の趾を發見し堂宇を建つと云ふ。其の後屢々重修せられ、近く咸豐二年（西紀一八五二）來觀和尙に至り、再び之を修築し、又日淸戰役に於て日本軍と挺身奮戰し威名を擧げ虎將軍と讃へられ出家して慶明和尙と呼ばれし者が、唐王殿石彭寺より此の寺に轉住して、大いに寺の復興に努力し先年遷化せらる。人皆稀に見る高德の僧と景仰せり。

傳說唐太宗の養病床

唐の太宗高句麗を征し、金州に輦を駐めし際、病を得て、大和尙山に靜養せし時、起臥に使用せりといふ所謂養病床なる表面一平なる巨石二個、唐王殿石彭寺の西傍に存す。長さ約二・五米、幅約一・五米、厚さ約〇・四米、他は長さ約二米、幅一・五米、厚さ約〇・四米ばかりあり。尙石床上には石枕あり。此の地は前面遠く海を望み、洮望頗るよく、又一方山に圍まれ暖く、或は養病に適せしんか。併し此の石床は潭僧の打座に用ひしものなるべし。

（印畫の復製を禁ず）

觀音閣勝水寺

（寫眞は全景）

觀音閣勝水寺は大和尙山の東腹、一大巨洞の迫る懸崖の處に建立せらる。

本寺も亦唐建說あれど何等確證なく、弘治三年の重修勝水寺碑によれば明の洪武の初め陳德新方影山なる二僧此の地に遊び、寺院の舊址を發見し堂宇を建つと云ふ。其の後屢々重修せられ、近く咸豐二年（西紀一八五二）來觀和尙に至り、再び之を修築し、又日淸戰役に於て日本軍と挺身奮戰し威名を擧げ虎將軍と讚へられ出家して廣明和尙と呼ばれし者が、唐王殿石彭寺より此の寺に轉住して、大いに寺の復興に努力し先年遷化せらる。人皆稱に見る高德の僧と景仰せり。

境內に古碑多く、最も古きものは明の弘治三年の碑にして次に嘉靖四年（西紀一五二五）萬曆四年（西紀一五七六）の碑あり。其の外は淸代及び最近のものなり。

觀音閣より南に下り行くこと約三丁にして、禪室あり、世に勝水寺と云ふ。併し何等寺院としての設備を具へざれば觀音閣と分離して考ふべきものにあらずして、兩者を一にして觀音閣勝水寺とすべきなり、此の事は數多くの重修の碑を見れば明かなり。

（印畫の復製を禁ず）

傳說唐太宗の養病床

唐の太宗高句麗を征し、金州に輦を駐めし際、病を得て、大和尙山に靜養せし時、起臥に使用せりといふ所謂養病床なる表面平なる巨石二個、唐王殿石彭寺の西傍に存す、一は長さ約二・五米、幅約一・五米、厚さ約〇・四米、他は長さ約二・二米、幅一・五米、厚さ約〇・四米ばかりあり。尙石床上には石枕あり。此の地は前面遠く海を望み、眺望頗るよく、又一方山に圍まれ暖く、或は養病に適せんか。併し此の石床は禪僧の打座に用ひしものなるべし。

（印畫の復製を禁ず）

弘治三年重修勝水

觀音閣勝水寺境内にある古城中、最も古きもの
は弘治三年（西紀一四九一）夏陸月朔旦立の重修
勝水寺碑あり。本誌は大和尙山卑沙城說の有力な
る資料の一として世に知らる。今其れに關する記
事を摘載すれば左の如し。
一郡城東去二十里。有山一峙。曰大黑山。松柟森
鬱。凌漢衝霄。翼鳳山枕鯨海。葡萄雉兎者往焉。
絕頂有井二眼。山畔有城一圍。黃唐太宗避兵所制。
傳所謂卑沙城是。
右碑記中大和尙山の山城が唐の太宗兵を避くる

（同三輯二十二頁大正細弘）

觀音閣勝水寺の洞窟

觀音閣勝水寺の山門をくぐると、高さ五米餘り、
長さ約九米、奥行約四米ばかりの亘洞があり、其
の中に堂宇があり、入口に一洞天等の扁額をかゝ
ぐ、正面に千手觀音菩薩、その背後に釋迦及び十
六羅漢の塑像を安置す。庭中に一小井あり、深さ
一〇米餘、水極めて清澄、勝水寺の名之に因むと
云ふ。遊覽の士赴けば汲みて茶を沸かして供す。
閣樓に登れば蔚然たる老樹、遙かに大連灣を臨み
景致誠に佳なり。

（印畫の復製を禁ず）

（同三輯二十二頁大正細弘）

弘治三年重修勝水寺碑

觀音閣勝水寺境内にある古城中、最も古きものは弘治三年（西紀一四九一）夏陸月朔旦立の重修勝水寺碑あり。本碑は大和尙山卑沙城説の有力なる資料の一として世に知らる。今其れに關する記事を摘載すれば左の如し。

一郡城東去二十里。有山一峙。曰大黑山。松柏森鬱。凌漢徊霄。翼風山枕瀕海。蒭蕘雉兎者往焉。絕頂有井二眼。山畔有城一圍。黃唐太宗避兵所制。傳聞卑沙城是。

有碑記中大和尙山の山城が唐の太宗兵を避ぐるため築造せし如くあれど、唐の太宗此の地に來る史實なければ誤りなること明かなり。

（印畫の復製を禁ず）

（回三輯二十圓大菊正細紙）

觀音閣勝水寺の洞窟

觀音閣勝水寺の山門をくぐると、高さ五米餘り、長さ約九米、奥行約四米ばかりの巨洞があり、其の中に堂宇があり、入口に一洞天等の扁額をかゝぐ、正面に千手觀音菩薩、その背後に釋迦及び十六羅漢の塑像を安置す。庭中に一小井あり、深さ一〇米餘、水極めて清澄、勝水寺の名之に因むと云ふ。遊覽の士赴けば汲みて茶を沸かして供す。閣樓に登れば蔚然たる老樹、遙かに大連灣を臨み景致誠に佳なり。

（印畫の復製を禁ず）

（回三輯二十圓大菊正細紙）

朝陽寺

朝陽寺は金州驛の東北約二里、大和尚山の西麓にある古刹にして、唐建説あれども信ずべくもなし。明の正德六年（西紀一五一一）胡文肅彬等の重修の碑あれば爾くも五百年は下らざるべし。古は明秀寺と稱せしこと境内の乾隆五十九年（西紀一七九五）の碑文中に見ゆ。朝陽寺の名は道光二十九年（西紀一八四九）の碑に始めて現はる。故に今より八十餘年前に朝陽寺と改稱せしものならん。寺名の由來に就いて老僧曰く、寺を環る皆山にして層巒疊翠、清溪長流、消々として絶えず山明水秀、故に明秀寺と命じ、又隆冬に植ひ朔風勁せず、花草猶存し、日光照和鶯春の如けれは朝陽寺と稱せるならんと。

本堂には釋迦を中央として左、右に文殊普賢の兩菩薩を安置する外、觀音地藏韋陀天王托塔李天王等を祀る。

（印畫の復製を禁ず）

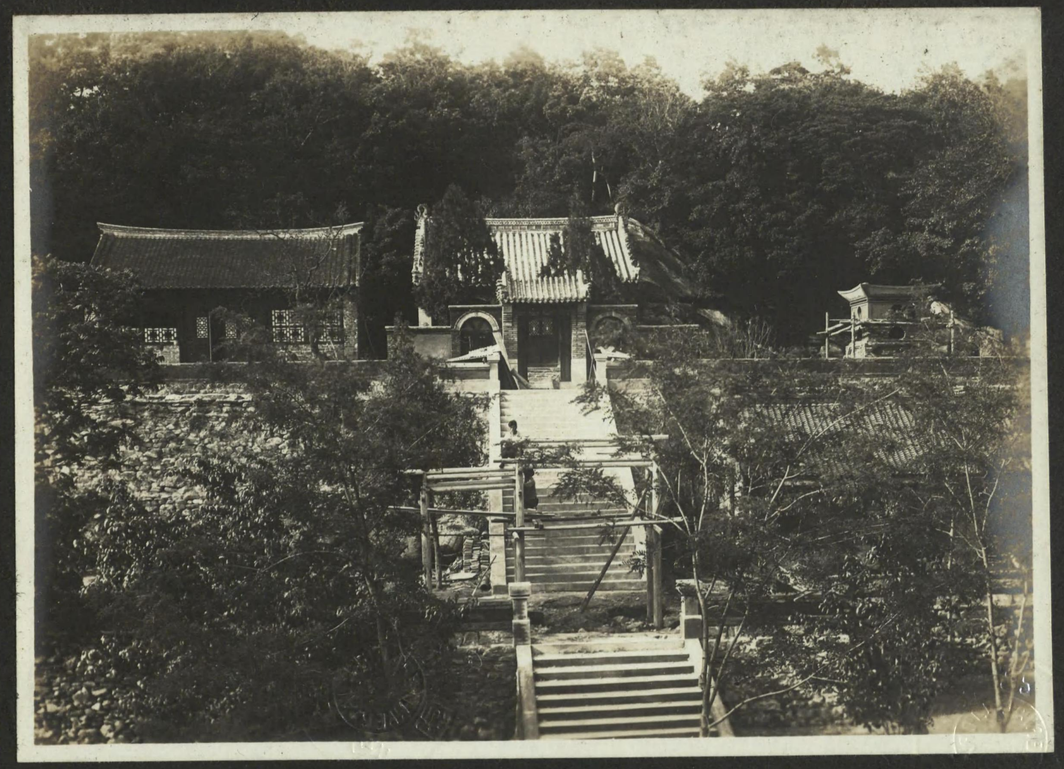
（同二輯二十觀大正細正）

響水

（寫眞は門）

響水觀は朝陽寺の北約五丁の處に在り。今道士住して響水觀と稱するも元は佛寺なるべし。其の創建の時代不明なれども乾隆元年（西紀一七三六）重修の記一碑にあれば相當古きものならん。門を入れば后土殿あり、殿内に皇天后土の額を中央にして、左に慈雲普渡、右に煉石補天の額をかゝく。其の額の下に后土、觀音、女媧の塑像を安置す。境内に日露の役明治三十七年五月南山攻撃の際

（同三輯二十觀大正細正）



響水觀

（寫眞は門）

響水觀は朝陽寺の北約五丁の處に在り。今道士住して響水觀と稱するも元は佛寺なるべし。其の創建の時代不明なれども乾隆元年（西紀一七三六）重修の記一碑にあれば相當古きものならん。門を入れば后土殿あり、殿内に皇天后土の額を中央にして、左に慈雲普渡、右に煉石補天の額をかゝく。其の額の下に后土、觀音、女媧の塑像を安置す。

境内に日露の役明治三十七年五月南山攻撃の際伏見大將宮殿下羽旆を駐められし記念碑あり。

（印畫の復製を省く）

（同三輯二十觀大臣細五）

朝陽寺

朝陽寺は金州驛の東北約二里、大和尚山の西麓にある古刹にして、唐建說あれども信ずべくもなし。明の正德六年（西紀一五一一）胡文肅彬等の重修の碑あれば尠くも五百年は下らざるべし。古は明秀寺と稱せしこと境内の乾隆五十九年（西紀一七九四）の碑文中に見ゆ。朝陽寺の名は道光二十九年（西紀一八四九）の碑に始めて現はる。故に今より八十餘年前に朝陽寺と改稱せしものなん。寺名の由來に就いて老僧曰く、寺を環る皆山にして層巒疊翠、清溪長流、消々として絶えず山明水秀、故に明秀寺と命じ、又隆冬に値ひ朔風勁せず、花草猶存するなら光照和暢春の如けれは朝陽寺と稱せんと。

釋迦を中央として左、右に文殊普賢の兩菩薩堂には釋迦牟尼佛、藥師如來、地藏菩薩、天王托塔李天王等を祀る。本堂に安置する外、觀音地藏菩薩、天王托塔李天王等を祀る。

（印畫の復製を省く）

（同二輯二十觀大臣細五）

瑤琴洞と遊僊床

響水觀の境内に瑤琴洞なる洞窟あり。清冽掬すべき泉湧出して細流となり、洗藥池に入り、更に龍口より天水壺へと落下し、涓々として溪間を流る。蓋し響水觀の名或は之に因めるか。境内靜閑にして樹木皆風韻を帶び婉も仙境の趣きあり。

洞の傍に遊僊床なる石床二個あり、道士此の床に來りて靜に冥想に耽り、俗を離れて仙遊するといふ。

（印畫の復製を禁ず）

（同三編二十觀大涇細涇）

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black